

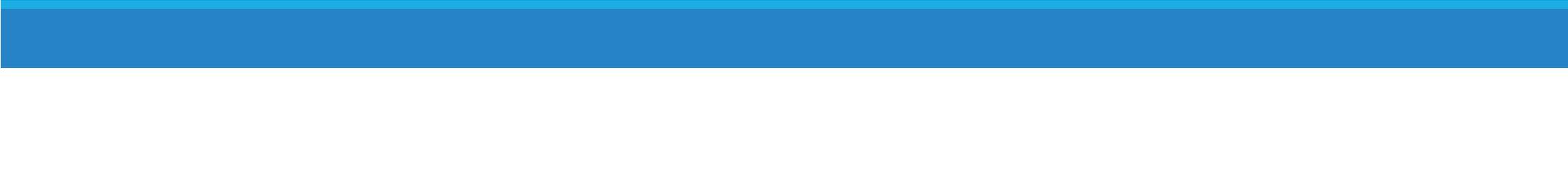
中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会

これからの教師教育のあり方に関する発表

日本教師教育学会 課題研究Ⅱ 「今後の教師教育の『グランドデザイン』」
の紹介を中心に

2025.5.7

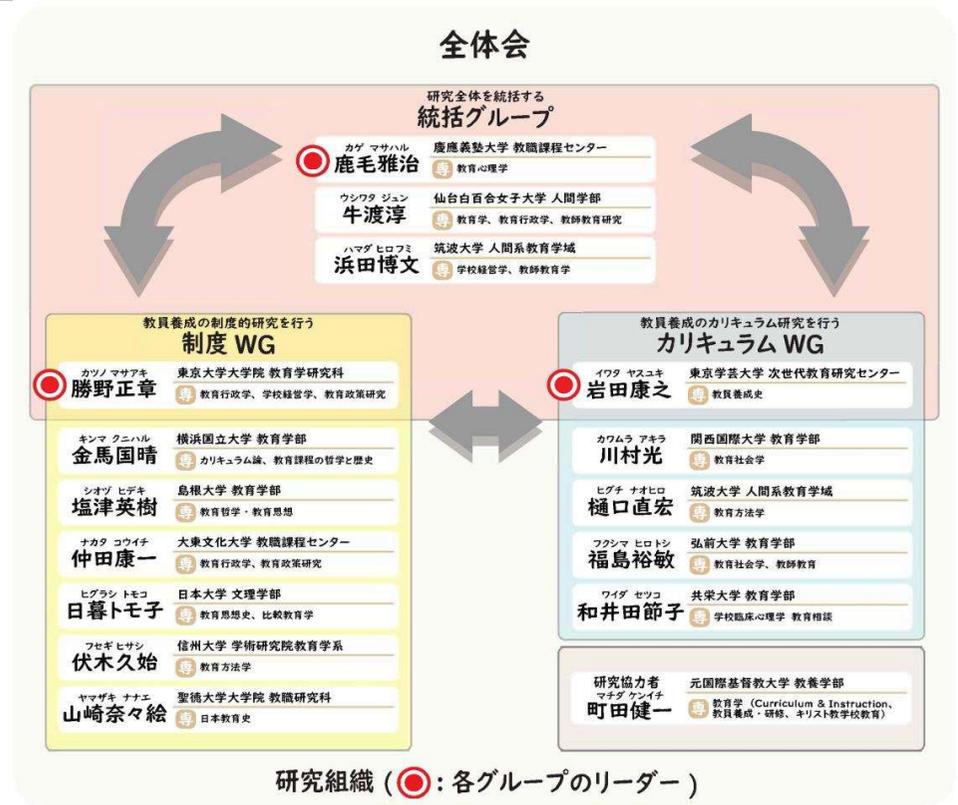
勝野正章(東京大学)



今後の教師教育の「グランドデザイン」

- 日本教師教育学会 課題研究Ⅱ「大学教育と教師」
(2020年9月～2023年9月)
- 科学研究費基盤研究(B)「大学における教員養成の再構築に関する理論的実証的・研究」(2021～2023年度)

<https://projectresearch2.jsste.jp/>



大学における教員養成の意味

教員養成を大学で行うことの意味は、次のように捉えられるのではないのでしょうか。すなわち、

「教養教育」を通じて働きかけの対象となる人間という存在や社会の在り方に関する深い洞察を行い市民性や人権感覚等を養うこと、

また、アカデミックな学問としての「教育学教育」を通じて正答が一義的には見つからない教育の諸問題に向き合い、多様な視点やアプローチから教育という営みについて考察し、教育のありうる姿を自ら構想・具体化する力を身につけること、

さらには、「諸学問の教育」を通して専門科学のディシプリンを身につけ、生涯を通じて科学の進歩や社会の変化に対応する力を身に付けることです。

こうした「市民的教養」や「教育学的教養」、そして、「教科の教養」が、将来のプロフェッショナルな教師を育てることを目指して行われる大学での養成教育の共通基盤(大学で学ぶべき基礎的素養)として改めて確認されるべきでしょう。

グランドデザインpp.1-2

グランドデザインの基本理念

- 教師像 「自律的でクリエイティブな高度専門職」

「学びと成長の専門家」「自ら学び考える教師」

- 「知的学問探究」のプロセスとしての教員養成

「探究的・研究的な学び」

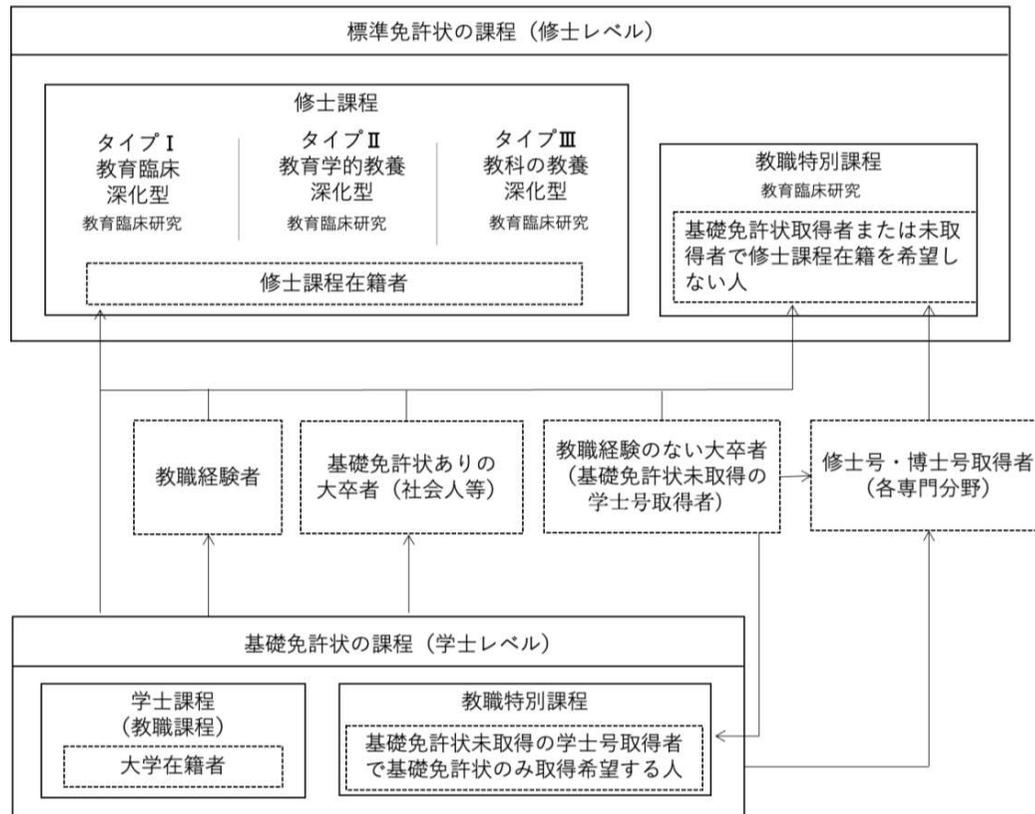
- 学士課程を超えた更なる学びの支援

学士課程＋大学院修士レベルの教員養成、学びたいときに学びたいことが学べる

- 「共通性」と「多様性」の保証

- 質の向上と量的確保

学士課程を超えた更なる学びの支援



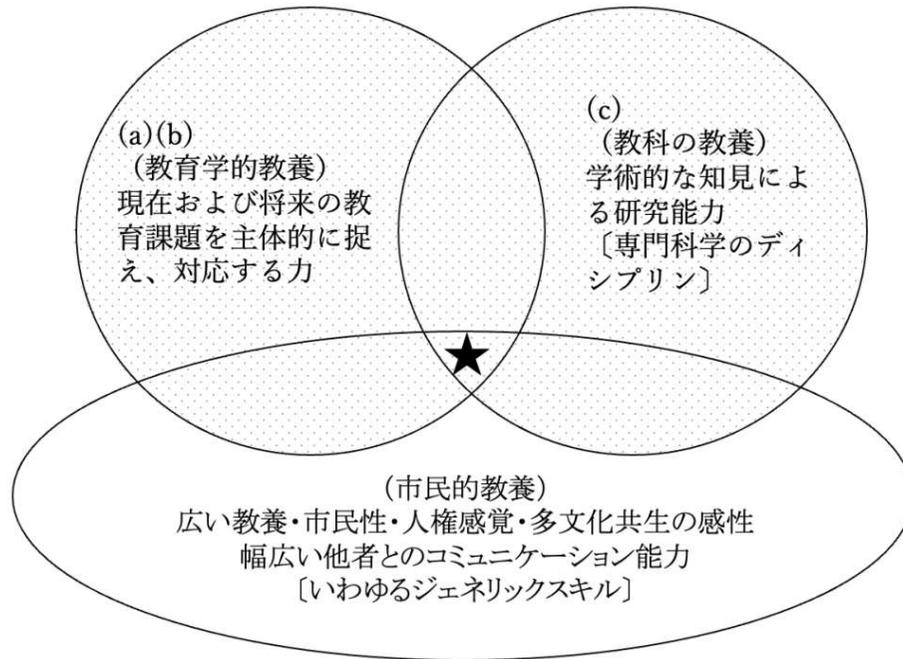
学士課程修了後すぐ大学院に進学／現職教員が修士レベルの講義・演習・実習等を受講して必要な単位を積み上げ／科目等履制度の利用により社会人にも広く機会を開放。

経済的負担の軽減、研修等定数の拡充、「有給研究休暇(サバティカル・リーブ)」制度の新設等により、「ストレートマスター」、現職教員、教職志望の社会人いずれも安心して学べるよう条件整備。

提案:「グランドデザイン」のモデル化 p.2

学士課程での学び

図2 二つのエッセンシャルカリキュラムの構成要素の概念図



※三つの円は教師教育エッセンシャルカリキュラムの領域を示し、網掛けは教職課程エッセンシャルカリキュラムの領域を示す。

留意すべきこと

- ・教員養成系単科大学 「市民的教養」の確保 (教職に方向付けない教養教育)
- ・総合大学の中の教員養成課程 「市民的教養」と「教育学的教養」「教科の教養」の関連
- ・大規模一般大学・学部で学部横断的な教職課程センター的組織を持つ場合「教育学的教養」と「教科の教養」が別組織で担われることへの注意
- ・小規模単科大学で特定分野の教員養成に特化した場合 「教育学的教養」が特定の分野の教育に偏しないような配慮

提案:「グランドデザイン」のモデル化 p.4

大学院修士課程レベルでの学び

タイプⅠ 「教育臨床深化型」(実践的研究中心)

タイプⅡ 「教育学的教養深化型」(教育学的教養に関する学術的研究中心)

タイプⅢ 「教科の教養深化型」(多様な教科・学問分野に関する学術的研究中心)

- ・ タイプⅠ の学習にもタイプⅡ やⅢの要素が入ることはあるが、Ⅱ・Ⅲは基本的に教育理論や教科専門の理論に基づいて 学術的な知見を深めることを通して、高度専門職 としての力量を高めることをねらいとしている。また、教師および教師志願者のニーズと多様性を尊重し、それぞれの専門性を高めることによって、「教師教育の高度化」と「教職の魅力の増加」を図ることをねらいとしている。
- ・ 三つのタイプのいずれかを選ぶかは、あくまでも 学ぶ人(学生または現職教師、社会人 等)自身のニーズと選択によるべきものであり、彼らの多様性と自主性を尊重することが、学校現場の教師の学びへの意欲と内実を保証することになる。

提案:「グランドデザイン」のモデル化 p.6

「教育臨床研究」

- ・タイプⅠ、Ⅱ、Ⅲいずれにおいても行う、大学院修士レベルの学びの基層(多様性の中の共通性)
- ・「教育臨床研究」は、「教えることを意識した教育学的知識または教科知識の再構成」を目的とした臨床研究で、教育学を基盤とした個人的・協働的な省察と研究を行うものである。ここでいう「臨床」とは、広義には「現場に根ざす」こと、狭義には「問題解決に資する」ことを意味する。ここでいう「現場」とは、学校現場に限らず、社会教育等も含めた幅広い教育実践の場を含む。
- ・「教育臨床研究」は、学内に教育学研究科がある大学では教育学研究科が全学に提供し、無い場合は、教職課程センター等に新たに設置される大学院レベルの科目として提供する。

提案:「グランドデザイン」のモデル化 p.6-7

事例 東京大学大学院における教員養成

- 学校教育高度化専攻 教職関連の高度専門家養成を目的として2006年4月開設

「教職開発」「教育内容開発」「学校開発政策」の3コース

カリキュラム 理論研究(基礎4、発展4)、実践研究(事例4、実地2)、論文指導(4) ほか

()内は修士課程修了のための必修単位数

- 副専攻制度 教職もしくは教職関連の専門職を目指す東京大学の大学院生が学校教育高度化専攻の科目を履修し、研究指導を受けることができる制度

対象 教育学研究科以外の研究科に所属する大学院生(修士課程・博士課程)

受入定数 約40名

修了に必要な単位数 10単位

学校教育高度化専攻の実践研究

- 「カリキュラムの事例研究」(浅井幸子教授)

授業の映像を検討すること、授業を参観しエッセイを書くこと、授業研究の方法に関する文献を読むこと等の活動を通して、複雑な教育実践を理解するための多様な方法について考察する。文献や映像やレポートをもとに、参加者でディスカッションを行う。グループでの検討を取り入れる。

- 「授業の実地研究」(藤江康彦教授)

各自研究テーマを設定し、学校において観察、記録、実習、調査等のフィールドワークを実施し、その報告を作成し提出する。

副専攻

- 副専攻登録者数(～2025年度) 78名(うち、修士48名、専門職11名、博士19名)→修了者38名

研究科・課程別登録者数 人文社会(15)、法学政治学(1)、総合文化(19)、理学(4)、工学(6)、農学生命科学(5)、医学(4)、数理科学(2)、新領域創生科学(3)、情報理工(2)、学際情報(7)、公共政策(10)

- 修了生(人文社会系研究科)の声

私は、入学前から教職に就くことを希望しており、当初は学部卒業後すぐに、と思っていましたが、専門分野の知識をより深く修得する必要があることを痛感し、大学院への進学を決意しました。院で2年も勉強していると、「学校で教える」ということから離れすぎて、教職の授業や教育実習で学んだことを忘れてしまうのでは、とも思いましたが、副専攻の履修がその不安を解消してくれました。特に、授業を撮影したビデオを視聴する事例研究と、附属学校での実地研究は、自分の授業を考える上で非常に参考になり、非常勤先すぐに役立ちました。また、同じ教員志望の院生や、学部からずっと教育のこと院生と話ができたのも嬉しいことでした。